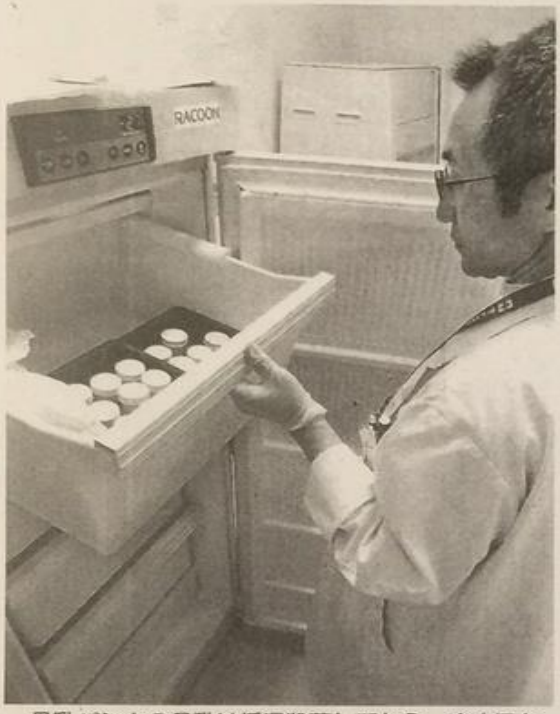
早産などの母支援

母乳バンク 熱い視線

早産や病気などで母乳の出が悪い母親に代わり、別の女性の母乳を専用施設で殺菌処理して与える「母乳バンク」への注目が高まっている。欧米では広く普及しているが、国内ではまだ1施設が始めたばかり。母乳には免疫力を高める効果などがあるとされ、関係者は「低体重で生まれる子が増えるなか、全国にシステムを広げたい」と話している。



母乳バンクの母乳は低温殺菌してから、冷凍保存される（東京都江東区の昭和大学江東豊洲病院）

免疫力向上、欧米で普及

「授乳の準備ができておらず、母乳をいただけて本当に助かりました」。昭和大学江東豊洲病院（東京・江東）で2月に長女を出産した都内に住む女性（35）は話す。予定より約2カ月も早い妊娠8カ月で、帝王切開により長女を出産。体重はわずか1800㌘だった。

同病院小児内科の水野克己教授から専用装置で低温殺菌し、ウイルス感染の危険性が極めて低い母乳を与える「母乳バンク」の説明を受け、提供を依頼。出産当日に数回母乳を譲り受け、しばらくしてから自身の母乳が出始めたという。

長女は病気にかかることもなく無事退院。元気に成長している。女性は「バンクのおかげでストレスなく自分の母乳を出すための準備ができた。出産時の選択肢の1つとして広がってほしい」と話す。

同病院では、水野教授の主導で昨年7月、専用装置を備えたバンクを新設し、独自の基準を作って運営。母乳の提供者には喫煙習慣がないことなどの条件を設けており、血液検査も受けてもらう。母乳は低温殺菌して細菌などの混入がないことを確認し、赤ちゃんに与えている。

これまでに同病院では6人の早産児にバンクの母乳を提供しており、全員が順調に育っているという。

欧米では、約100年前から母乳バンクが専門組織や各病院で整備されているが、日本では対応が遅れていた。

水野教授が代表を務める厚労省研究班は昨年7月、新生児集中治療室（NICU）がある全国の病院179施設を対象に調査を実施。回答を得た126施設のうち25％にあたる32施設が、母親以外の女性から提供された未殺菌の母乳を含む「もらい乳」を使用していた。また、7割以上の医師が専用施設を備えた「母乳バンク」が必要だと回答していた。

水野教授は「早産児にとって母乳は免疫力を高める薬のようなもの」と説明。「高齢出産やせている女性の増加などを背景に、低体重の小さい赤ちゃんが産まれる割合は増えている。母乳バンクの需要は高まっており、安全な母乳を提供できるシステムを全国に広げたい」と話している。

出生児2500㌘未満 10人に1人

高齢出産など背景に

厚生労働省の人口動態統計によると、早産などで体重が2500㌘未満で生まれる低出生体重児の割合は高止まりしている。2002年以降、出生児のおよそ10人に1人が低出生体重児という状況が続いており、高齢出産の増加などが背景にあるとみられる。

13年は9万8624人で全体の9・6％を占め、少子化にもかかわらず20年前の1993年と比べて約1万5千人増えている。

早産児は体の機能が未成熟なため免疫の働きが不十分で、様々な病気にかかる危険がある。赤ちゃんが必要とする栄養が多く含まれている母乳をできるだけ早く与えることで、発育を助けるとともに点滴での栄養補給を通じた感染症を減らすなどの効果もあるとされる。